

「途上国」から「フィリピン」へ

外国語学部 外国語学科 4年 鈴木 結芽

★印象に残ったエピソードと感想

私は、大学での授業や講演会をきっかけに途上国が抱える課題に関心を持ち、その後少しずつ学びを深め、考える中で、「先進国・途上国」というような「支援される側・する側」というような関係ではない、対等な関係が理想だと考えるようになった。しかし、そう思いながらも「途上国」と言われる国のことは「途上国」として見てしまう自分がいた。そのため、実際に現地に足を運んで自分の目で見ることで、人からの情報といった間接的ではない、自分の見方を確立させたいと考えたことが応募に至った経緯である。

初日から2日目くらいまでは、日本では見たことのないほどの高さのビルが立ち並ぶ都市と台風が来たらすぐに建物が壊れてしまいそうな貧困地域の格差など、「途上国」としてフィリピンを見ていた。しかし、ある日の西南タイム（毎日の振り返りの時間）で、いつの間にか自分がフィリピンを「途上国」としてではなく、「フィリピン」として見ていることに気づいた。それは、「途上国」としてのマイナスな部分ばかりではなく、関わる人が多くなるにつれて、人々の温かさをはじめとした良さを次々に知っていったからではないかと思う。いつも私たちのことを第一に考え、守ってくださった FH（現地支援団体）のスタッフの方々をはじめ、心からの笑顔を見せてくれるホテルの方々、メンバーの誕生日を私たちと一緒に全力でお祝いしてくださった飲食店の従業員の方々、大歓迎してくれた子供たち、車ですれ違いざまに手を振ってくださった方々・挙げだすと足りないくらいフィリピンの方々には温かく、私はフィリピンが大好きになった。そして、格差やごみの問題など、課題があっても、それは「途上国」の課題ではなく、「フィリピン」の課題として考えることができるようになっていた。



★活動中のこぼれ話

活動中、飲食店の前で食べ物をくれるようお願いする子供たちや、路上でお金を要求する人を見かけることがあった。一方で、飲食店で食事を楽しむ人々や、時には食べきれないほど安全な食事をたくさん提供してもらった私たち。この格差に愕然とした。雇用など、食べ物やお金を要求するほどの彼らの生活を変えるための何かもあり、考え続けていきたい課題だと感じた。

★これまでの私／これからの私

もう一つの参加目的だった「具体的に自分が何をしたいのか」を探すこと。この答えはまだ見つかっておらず、今、「これをしたんだ」と言うことはまだできない。しかし、誰かの役に立ちたいことは確かだ。FHの方々から学んだように、自分にできる誰かのための小さなことを積み重ねていきたい。そして、今後も様々な人に出会い、学びを得ていくことで、自分のやりたいことを明確にしたい。

愛を流す

人間科学部 心理学科 4年 笠 葉月

★印象に残ったエピソードと感想

「世界のために、今の自分に何が出来るか考えたことはありますか？」これは、活動のはじめに FH(現地支援団体)の方が私達に問いかけた言葉です。「小さくても良いから自分の身近な人に愛を流していくことが大切であり、フィリピンの街をみて、自分に何が出来るか、何が出来ないか考えると思うけれど、『小さなことに大きな愛をもってやりなさい』というマザーテレサの言葉を思い出して欲しい」と紹介してくださり、この言葉が私が活動する上でのテーマとなりました。



実際に街に出ると貧困と経済格差を目の当たりにし、自分に何が出来るのか不安に襲われましたが、子ども達に会った瞬間、そのパワーに圧倒されました。小学校で子どもたちと交流した際に、名前を呼び合いハグするという流れが多く、関わる時間は短くても、その瞬間の愛に溢れており、お互いに存在していることを確かめ合い、認め合い、大きな愛に包まれるような感覚になりました。礼拝でのお話から、この温かさや愛情の深さは基督教の精神が根付いていることによるものではないかと考え、幸せとは愛を共有することではないかと感じました。自分ももっと愛を伝えたい、深く関わりたいと強く思い、より多くのハグと言葉で、感謝と愛を示すように心がけました。

この気づきは1人1人と関わったことで得たものであるため、日本でも何事も他者に目を向けて、自分ごととして向きあっていくことを大切にしたいと強く感じました。そのために多くの人と関わり、経験し、考えることが必要であると確信することが出来た時間でした。この9日間は今までの人生で最も濃く、忘れたくない、貴重で大切な経験です。関わってくださった全ての人に深い感謝を捧げ、これからも愛を流し続けます。

★活動中のこぼれ話

生活体験の中で子ども達と、車を避け、砂を払い、ハエを何度も振り払いながら折り紙をする時間がありました。このような環境でも愛に溢れた笑顔は輝いていて、貧困と幸せについて改めて考え直すきっかけになりました。数時間程しか交流していないにも関わらず、走って車を追いかけて手を振ってくれたことは、一生胸に刻まれる深い経験になりました。



★これまでの私／これからの私

ワークキャンプ部というボランティアサークルに4年間所属しており、障がいを持っている子どもたちが楽しめるような遊びを考え、制作して届ける活動や、近くの高校と連携して不登校の中学生に勉強を教えるなどの活動を行っていました。4月からは大学院へ進学し、卒業後は心理士として児童養護施設などで子どもと関わる仕事がしたいと考えています。

愛と感謝

国際文化学部 国際文化学科 4年 吉原 凜

★印象に残ったエピソードと感想

私は現地の生活を1日体験する活動が1番印象に残っています。バナナを使ったお菓子を50年間売っているナナイさんの家でお菓子を作り、30°Cを超える中、街を練り歩いて販売を行いました。想像以上に売れず、材料費を考えたら利益はほんの一握りであったと思います。しかし、ナナイさんは楽しそうにお菓子作りをしていたし、家族もとても楽しそうに生活していました。働かなければならないのではなく、より生活を豊かにするために働いている、そんな雰囲気を感じました。確かに、フィリピンには金銭的に貧しいコミュニティが多くあります。しかし、そこに住む人々は日本人よりも遥かに楽しそうに生活していて、ボランティアをしに行ったはずなのに逆に元気をたくさん与えられた本当に幸せな9日間でした。



活動する場所や内容は毎日異なっていた9日間でしたが、毎日人の温かさに触れていました。「感謝の気持ちを表現しないことは、ラッピングされたプレゼントを与えないのと同じだ」これは FH(現地支援団体)のスタッフが最終日に言っていた言葉です。フィリピンで関わった人々が全力で愛や感謝を伝えてくれたように、これからは私もどんなことにも、どんなに近くにいる人にも大きな愛と感謝をもって関わっていきたくて強く思いました。また、私たちが今回フィリピンで行った小さな活動が、現地の人々にとって大きなインパクトとなって、これからのフィリピンに繋がっていきますように。

大学生活最後に思い出を作ろうと思い応募したこのワークキャンプが、人生で最も自分を見つめ直し、考えるきっかけとなったことに私自身驚いています。フィリピンで出会った全ての方、西南チームみんなが大好きです。サラマポ!

★活動中のこぼれ話

出発の日、福岡空港でキャリーケースが壊れて開かなくなっていました。とても焦っていたのですが、そんなとき、引率の職員の方々や、西南チームの学生のみんなが心配してくれて、焦っていた気持ちが和らいだのを覚えています。結局、鍵専門業者の人を呼んで開けてもらい、無事フィリピンに飛び立ちました(笑)

★これまでの私／これからの私

私は4月から福岡市の職員として働き始めます。公務員は人と社会のために幸せな生活の舞台を作り、支える仕事を担う職業だと考えています。人によって幸せの感じ方は異なるし、幸せがいったいどういうものなのかは答えが出ない問いで、困難もたくさんあると思いますが、今回の活動で考えたことを思い出しながら日々働いていきます。



感謝と尊敬から生まれる愛

経済学部 国際経済学科 3年 河野 孝太郎

★印象に残ったエピソードと感想

フィリピン人の生活を見て「もったいない」の精神が日本より強いと感じました。私たちが移動する際に乗っていたバンはとても年季の入ったものでしたが、修理を繰り返した跡があったり、バックミラーは最新型のモニターのようなものを用いたりするなどして利用していました。また、家庭体験でお世話になった家族では食品を一粒残らず食べたり、ビニール袋を再利用したりする姿が印象的でした。ものを大切にすることは、私たちが見習うべき点だと気づかされました。



一方、フィリピンの抱える課題として「衛生問題」が印象的でした。街中に多く落ちているごみ・様々な場所で感じる異臭・川や池に直接流れる下水・自動車の排気ガスなど健康に生きるための弊害となってしまう衛生問題が蔓延していることを体感しました。私たちが行った子どもたちへの手洗い・歯磨き指導が、フィリピンの方々にとって少しでも衛生問題を考えるきっかけになればと願っていますし、今後も私にできることを考えていきます。

そして、現地の小学生と先生方・教会の方々・家庭体験で一日を共にしたご家族・訪れた地域で生活しているの方々・FH(現地支援団体)のスタッフなど数えきれないほどたくさんの方々と一緒に楽しく交流し、触れ合うことができたことが一番印象に残っています。フィリピンの方々には想像以上に明るく、温かく、優しい方々ばかりでした。9日間通して、怒っているフィリピン人を見ることはありませんでした。そんな彼らと交流する中で、私の中に強く沸き上がった感情があります。それが「感謝」と「尊敬」です。見ず知らずの私たちを受け入れてくれた現地の方々への感謝と、決して日本より快適とは言えない環境で過ごす彼らに対する尊敬の思いが溢れています。そしてこの「感謝」と「尊敬」は、生活を共にしたチームメンバー、引率していただいた日本国際飢餓対策機構の方々、西南ボランティアセンターの皆さんにも抱えています。互いに助け合い、高め合ったメンバーとして感謝と尊敬の気持ちでいっぱいです。さらに、感謝と尊敬から生まれるのが「愛」だと自分なりの答えにたどり着きました。誰に対しても、どんなものに対しても感謝と尊敬を忘れず、愛する気持ちでこれから過ごしていきます。ありがとうっば! Salamat po!

★活動中のこぼれ話

9日間ともに行動してくれた FH のスタッフの方々とても仲良くなれたことに感動しました。活動内容に関する話し合いだけでなく、フィリピン特有の文化や私生活、趣味などを拙い英語ではありますがたくさん話すことができました。仲良くなった分、別れが辛かったです。遠いフィリピンの地に分かり合える仲間ができたことをとてもうれしく思っています!Power!!

★これまでの私／これからの私

私は今回のワークキャンプが大学生活において初めてのボランティア活動でした。ずっと受け身の姿勢でいる自分を変え、積極的に行動したいとの思いで参加を申し込みました。活動を通して明らかに自分の思考・物事への姿勢が変化しました。自分にできることは何なのか考え、小さなことから始めることで後に大きな変化につながると思います。この姿勢を今後の活動に活かしていきます。

愛すること、感謝すること

法学部 国際関係法学科 3年 徳永 彩乃

★印象に残ったエピソードと感想

私が今回このタイトルにした理由は、9日間の活動の全てにおいて「感謝」と「愛」の二つが必ずそこにあったからです。フィリピンという国は自分自身が想像していた以上に経済格差というものが激しく、活動初日に目に入ってくる街の風景がとても衝撃的でした。このフィリピンボランティアには、昨年夏に参加したインドでの貧困問題の解決を図るプログラムで衛生教育の不足やゴミのポイ捨て文化がなんとなく自分の中で引っ掛かり、場所は違えどその解決に尽力したいと思い参加しました。訪問先の小学校や教会での劇やダンスを通して、手を洗うことの大切さ、歯磨きの重要性を伝えることなど自分の中で最もやりたかったことをやっているはずなのに、果たしてこれがどの位子どもたちに響いているのか、どの位影響力があるのか、不安に感じていました。そんな時、私たちの活動をサポートして下さっていた FH(現地支援団体)のスタッフの方の「小さなことの積み重ね」「小さなことを愛を持って始める」この2つの言葉が活動中の私の中の大きな支えと励みになりました。自分が、今できること、やろうとしていることを全力でやろう、そうさせてくれる言葉でした。また、フィリピンの人たちの生活にはキリスト教を強く崇拝する文化が根付いており、活動中私たちも食前や活動後毎日お祈りをする時間がありました。そこで気づいたことは、「当たり前なのに感謝する当たり前」を日本人が忘れてしまっているのではないか、ということです。活動中に何回も隣にいる友達に「you are blessed(あなたは祝福されている)」という言葉かける機会がありました。その言葉をかけてもらうこと、また友達に自分自身がかけるだけでなんとなく少しハッピーな気持ちになれる、そんな気がしました。今自分が存在していること、友達と声をかけあえること、ご飯が食べられること、毎日生きていること、そのことに感謝することでありがたさに気づくことができ、自然と幸せな気持ちになりました。物質では測れない幸せの定義を見つけることができた気がします。



★活動中のこぼれ話

毎日活動後にあった「西南タイム(毎日の振り返りの時間)」が私の中で一番貴重な時間だったと感じます。15人が活動中はすごく明るく楽しく活動し、ホテルに帰って1日を振り返った時に気づきや本音を言い合った時間は、たとえ疲れていても自然と集中できたとし、毎日流した涙を流すという今までの人生にはなかった仲間と話す時間でした。また、この9日間で「食べること」にもすごく向きあえました。毎日おいしいご飯、そしておやつまで用意していただき、食べることに困らなかったです。しかしながら、ジャンクフードや毎日お菓子を食べる習慣があり、訪問先の小学校でもお菓子の袋がポイ捨てされていたり、少し肥満気味の子ども、それとは相対的にやせ細った子どもなど栄養不足になりがちなのではないかと感じました。食べ物食べるだけで良いというものではないため、食育の必要性も見えました。

★これまでの私／これからの私

これまでの私は時折楽観的に生きることが辛い時期があり学校にいけない時期もありました。でもこの9日間を経て、フィリピンの人たち、また、同じ目的を達成しようとする西南の同志との出会いを通して、与えられた人生をとことん楽しんでやろうじゃないか!そう決めるきっかけになりました。滞在中は英語を話す機会がたくさんあり、今まで自分が頑張ってきた英語を活かすことができ、自分自身の成長を実感できました。将来は、どんな形でもいいので絶対に貧困に悩む人の力になれるそんな仕事に就きたいと思いました。

感謝と尊敬から生まれる愛

外国語学部 外国語学科 2年 工藤 琉楠

★印象に残ったエピソードと感想

今回9日間の活動にあたって出発前の気持ちをノートに記録していました。それは、フィリピンの現状を知りボランティア活動をしたい人が日本にいることを知ってもらいたいという気持ちでした。小さな一歩が少しずつ何かを変え、それが繋がって大きなものになる。それはとても時間がかかるかもしれないけれど、近道はないことを実感しました。その上で FH(現地支援団体)から指導を受けた際のこの言葉が印象に残っています。コリントの信徒への手紙一「Let all that you do be done in love.」、マザーテレサの名言「We can do no great things, only small things with great love.」。その小さなこととは誰でも出来ることで、表情や言葉で通じ合えたり与えたりするものでした。



また教会や学校で出会った子がどういった層の子なのかは重要ではなく、貧困から抜け出してきた人々の生活の場の提供も必要だということ学びました。とはいっても、経済格差の家を目の当たりにして違和感を持つこともあり、それでも痛みをもって生きることが重要だということに気付かされました。生活体験で訪れた焼鳥屋を営む家では、14時から22時まで売れるまで働くことを知りました。無理してでも家族の為に働いている姿を直接見て体験したことは自分を見つめ直すきっかけにもなりました。自分たちの活動がどんどん繋がっていき、遠い地で気にかけている人の存在や彼らの為に何かしたいと思う気持ちが伝わると、今回私達が出会った子達も何かしたいと思ってくれたり、興味を持ってくれる人が出てきたりするのではないかと信じています。

フィリピンは笑顔の絶えない国でした。出会った人みんな、私達を笑顔で快く迎え入れてくれました。他者を大切にしているフィリピンの人間性を感じました。今回の活動を通して得た課題を自分自身の問題として捉え、それについて何を変えることが出来るのか考えていきたいです。そして、相手を大切に自分を大切に自分が出来る最大限のことを施したいです。

★活動中のこぼれ話

フィリピンで最も多く使用されている言語はタガログ語ですが、この言語は語尾に po をつけると丁寧語になります。だから、お願いするときも英語で言った後に po を付けるとより丁寧になるのです。1日生活体験で訪れた家で焼き鳥を売る際、お金を家に置いてきたよと言う客に対して、you go home po, and you get money po. と言いなさいと言われたことはとても興味深かったです。

★これまでの私／これからの私

今まで正式なボランティア活動を経験したことがなく、この活動が人生で初めてのボランティアとなりました。短い間ではありましたが、これをゴールだとは思わずに、ここからがスタートという覚悟で様々な問題について考えたいし学んでいきたいと思いました。その際も、「小さなことの積み重ね」を大切にしたいです。そして、マラボン小学校に6年前先輩方が植えた苗が木に成長したマングローブのように、大きく根を張り繋がっていきたいと感じました。

小さな行動が大きな力に

外国語学部 外国語学科 2年 小田 佳映

★印象に残ったエピソードと感想

今回のワークキャンプボランティアの活動の中で最も印象に残った活動は、5日目に行った小学校でのトイレ掃除とペンキ塗りでした。私はそれまでの活動に対し、果たして自分たちが行っていることは現地の人々にとってちゃんと役に立っているのかという疑問が湧いていました。しかし、私たちが訪問した小学校は、莫大な生徒数に対して教師の数が少なく、トイレ掃除にまで手が回っていないという現状を知り、少しは役に立つ活動ができたのではないかと思います。また、FH(現地支援団体)スタッフからはこんな話もありました。「遠くにいる私たちが彼らのことを気にかけているという行為自体が彼らにとって大きな力になっている」ということです。この言葉で私は、このボランティアに一步踏み出してみても本当に良かったと思ったし、小さなことでもいいから、何事も挑戦してみることが大事だと感じました。



フィリピンで過ごした9日間は、間違いなく私の人生において、かけがえのない有意義な時間になったと本当に感じています。私は普段から、自分の思ったこと・感じたことを言語化するという行為にものすごく苦手意識があります。しかし、この9日間の活動の中で浮かび上がった感情や疑問を自分のメモに記していき、さらに「西南タイム(毎日の振り返りの時間)」では、参加者それぞれが感じたことを共有し合いました。今までは思ったことがあってもただ自分の心の奥底に秘めておくだけでしたが、初めてこんな真剣に話し合うという場に参加しました。自分の感情や感じた疑問を一緒にいる仲間達と共有し、考える。このように、様々な視点からの考えを知ることで皆さんから学ぶことはとても多く、改めて「話し合う」ということの大切さを学び、自分自身も大きく成長できたのではないかと思います。

★活動中のこぼれ話

現地の子供達に折り紙を教えているときに、最初はシャイで静かな子達でしたが、自分の武器である笑顔を持って常に接していたら、折り紙が完成した時にはニヤリと笑顔を見せてくれて、私も幸せな気持ちになれました。色んな感情が交錯した今回の活動でしたが、これからも常に周りの人に「愛」を持って接することを心掛けて行動したいと思います。



★これまでの私／これからの私

私は常に様々なことに興味を持ち、思い立ったらすぐ行動を起こします。これまでも、大学祭の実行委員や学外のボランティアなどの活動に積極的に参加してきました。これからも、継続的にやりたいと思ったことはいつまでもいいので心のどこかに持っておき、行動を起こしていきたいです。また、SNSが発展してきた今の時代で、それを通じて自分が経験したことを共有することで誰かの心を動かせたらと考えています。

私自身が出来ること

経済学部 国際経済学科 2年 安里 優来

★印象に残ったエピソードと感想

私は発展途上国の経済発展策というテーマで探究活動を行っています。その中で SDGs に焦点を当てて探究していますが、実際に発展途上国の現状や生活の様子、問題点などを肌で感じることができるこのプログラムに参加することで私自身の研究テーマの深掘りが出来ると思い、この海外ボランティアに応募しました。実際にこのプログラムを終えてみて、フィリピンでの人の温かさや元気いっぱいの子ども達、仲間との出会いに恵まれて本当に参加して良かったと思えました。



その中でも私の印象に残っていることは、私たちが行っている活動は本当に意味のあるものなのかを深く考えられたことです。プログラムの中で私たちが教会や小学校で披露した、歯磨きダンスや折り紙などは本当に現地の人たちは喜んでくれたり、保健衛生の重要性を理解してくれているだろうかと最初はモヤモヤとする部分がありました。ですが、FH(現地支援団体)の方達が掛けてくれた言葉で子ども達や現地の人々は、あなた達がやってくれたことにとても喜んでくれていて、意味の無いことではないと言ってくれました。このような経験から私は、私たちが現地の人々の役に立ちたいと思える感情や笑顔で子ども達や現地の人々と接することで、最初は相手の為になっているのかというモヤモヤが、私自身とフィリピンの人たちにとっても忘れられないかけがえのない瞬間になっていると気付かせてもらいました。

さらに、フィリピンの町中に当たり前のようにゴミが溜まっている現状や、子供達がゴミを捨てる姿を実際に見て、ゴミ問題や住み続けられる町づくりの分野にとっても興味を持つことができ、探究活動を深めたいと思いました。

★活動中のこぼれ話

フィリピンのジョリビーというファストフード店で夕食を食べる際にみんなに誕生日を祝ってもらいました。その時にみんなが誕生日を祝ってくれたことは、周りからしたら一人の誕生日を祝った出来事に過ぎないかもしれないけど、祝われた本人はこれからも忘れることのない大切な思い出になると感じました。



★これまでの私／これからの私

これまで、沖縄の珊瑚の植え付けなどのボランティアに参加した程度でしたが、本企画のボランティアに参加して海外でのボランティアは日本で言うボランティアと人間性や生活環境も踏まえて全く違う経験が出来ました。私自身、英語が苦手な為、今回のボランティア中も、言語でのコミュニケーションに苦戦しました。もっと沢山のことを知るために、言語の勉強を頑張りたいです。

学生の私たちに何ができるか考えた日々

法学部 国際関係法学科 2年 森山 和奏

★印象に残ったエピソードと感想

「あなたたちが訪れたことで、ここで暮らす人々は世界から見捨てられた存在ではないことを認識することができる。」私が、このワークキャンプで一番印象に残った言葉です。

9日間のフィリピンの滞在で私は何ができるのだろうか、そのような思いを抱きつつフィリピンに渡航しました。フィリピンの小学校や教会を訪問し、衛生教育やダンスの披露、折り紙を子どもたちに教える中で、子どもたちが喜んでくれている姿を見て、出し物や折り紙を準備してきて良かったと純粋に嬉しい気持ちになりました。それとは裏腹に、実際に子どもたちの話を聞く中で、余命宣告された母とは遠くに暮らしているものの、家にお金がないために生きている間にもう母に直接会いに行く事は出来ないかもしれないという話や、ドレスを買うお金がなく憧れのプロムに参加することができないなど、心を開いて子どもたちが話してくれているのにも関わらず、話を「うん、うん」と聞くことしかできない自分自身の無力さも感じていました。同じように感じていた他の西南生とも私たちに何ができるのだろうかと何度も話し合い、頭を悩ませた日々でした。



そんな中、一緒に活動して下さったFH(現地支援団体)のスタッフが、「あなたたちの活動は、貧困地域に暮らす人々を empower して(力づけて)いるのだよ」と教えてくれました。私たちがフィリピンへ訪問し、彼らと関わることで、彼らは自分たちが社会から、世界から見捨てられた存在ではないことを認識することができる。そして、その認識が自分たちの社会を良くしていこうとする思いの後押しになるのだということを学びました。国際協力の現場では、一方的な支援をするのではなく、人々が自らの力でよりよい社会を構築していくことが鍵となると言われますが、つまりそれは、人々に寄り添うことが根本的なものなのではないかと感じ、現地を訪れることが国際協力の初めの一歩なのだと実感しました。

机上やニュースで学ぶだけではなく、キリスト教の教えにあるように、「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣く」ことを実践することで社会問題に取り組める人材になりたいと感じています。

★活動中のこぼれ話

フィリピンの子どもたちはみんな人懐っこくて、小学校に遊びに行くと、みんな手を振ったりハートマークを作ってくれます。歓迎ムードにとっても温かい気持ちになりました!



★これまでの私／これからの私

高校生の頃は、YMCAという団体で海外にルーツを持つ子どもたちの宿題サポートや、AFSという国際交流団体で留学生や留学前の高校生のサポート、国際交流イベント開催のお手伝いをしていました。

大学に入ってから、長期休暇を使い、ベトナム、タイ、フランスで現地の暮らしを体験しました。タイでは、現地のNGO団体で山岳少数民族の支援を行うために、2週間半の間タイの山奥で生活していました。

現地のコミュニティを知って

人間科学部 児童教育学科 2年 中原 あい

★印象に残ったエピソードと感想

私が1番印象に残った、考えさせられた活動は、7日目の生活体験です。一般家庭にお邪魔させて頂き、仕事体験をしたり一緒にご飯を食べ、交流を深めるプログラムで、私はナボタスにある家庭を訪問しました。

それまで車内からしか見ていなかった貧困地域に初めて足を踏み入れ、現地の人と関わったことで、沢山の衝撃、発見がありました。トイレや水など衛生環境の悪さや、ゴミのポイ捨て、町や



子どもたちの臭い、路上に座り込む痩せ細った人、お肉屋さんで群がる虫など、貧困地域ならではの現状を多く目の当たりにしましたが、特に印象深かったのは、地域コミュニティの繋がりの強さです。日中は家の前で話す大人や、大人数で遊ぶ子どもたちで路地が賑わっており、近所の人向けの小さな出店がいくつもありました。ご近所付き合いが希薄化している日本とは正反対に、お互いに顔見知りでコミュニティ全体がひとつの家族のように見えました。

見知らぬ私たちに対しても、全ての人が笑顔で温かく挨拶をして下さり、親切・フレンドリー・愛に溢れた、などと言われるフィリピン人の国民性が至る所で見て取れました。

そして、この9日間、貧困問題・衛生問題について西南メンバーと沢山議論してきましたが、この日の生活体験を通して新たな気づきがありました。それは、人々の生活と切っても切り離せないコミュニティの存在です。貧困地域ではトタン屋根の家同士が重なり合っているため簡単に建て替えや引っ越しができない状況であり、また大切なコミュニティから離れることはフィリピンの人々にとって避けたい事です。よって、不衛生な環境が蓄積し、改善に至らないという結果に繋がるのではないかと感じました。

私たちは、貧困や衛生環境の悪さなどの目の前の事実や数字、外部の情報などから解決策や支援方法を考えがちですが、実際にそこに住んでいる人のコミュニティ、国民性、文化、習慣を知った上で社会問題と向き合っていくことが大切なのだと気付かされました。

★活動中のこぼれ話

教会で行われた日曜日の礼拝に参加しました。想像していた厳かな礼拝とは違い、ポップな賛美歌を全員で熱唱する光景に衝撃を受けました。約4曲を30分以上に渡って歌った中で、特に♪「Every Praise」、「I speak Jesus」がとても印象的でした。帰国してからもこの曲を聴くと、フィリピンでの日々が思い出されます。

★これまでの私／これからの私

将来は小学校教師を目指していて、学生サポーター・野外教育活動の学生スタッフ・多胎児団体のボランティア・運動部のマネージャー・手話サークルなど、1年生の頃からやりたい!と思ったことには沢山チャレンジしてきました。新しいことに挑戦するのは勇気がいるし、両立も大変ですが、その分沢山の経験・思い出を得ることができます!!

9 日間の意義

国際文化学部 国際文化学科 2年 齊田 さくら

★印象に残ったエピソードと感想

活動が始まった頃は、自分たちが準備したもので喜んでくれる子供たちがかわいい!楽しい!たくさん「ありがとう」と言われてうれしい!といったポジティブな気持ちでいっぱいでした。しかし活動が進むにつれて、この活動は広い視野から見てフィリピンの方のためになっているのか不安になりました。なぜなら関わる人たちが覚悟していたほど貧困ではなく、ひどい状態で暮らしているわけではなかったからです。教会の清掃や学校の修繕は私たちが来なかったとしても、大変だろうけど地元の方が終わらせていただろうし、子どもたちに教えた歯磨きや手洗いは私たちがいなくても小学校で少しずつ普及しており時間をかけて今後浸透していくのだらうと思います。そしてなにより、ぼろぼろの服を着ている子どもたちを街中で見て、制服を着て学校に通えている子どもたちを支援の対象にしているのだから、と強く感じるようになりました。この思いを持っているメンバーも多く、西南タイム(毎日の振り返りの時間)で私たちに何ができるのか、ここに来た意義は何なのか、何度も話し合ってたくさん考えました。そんな私たちを見てFH(現地支援団体)の方が「今回君たちが関わった人びとが世界から見捨てられていない存在として自覚できたこと、世界には自分を気にかけてくれる人がいると伝えられたことにこの活動の意義がある」とお話ししてくださいました。私たちが活動をした数日間でフィリピンの現状や問題が解決に向かったとはいえないかもしれませんが、小学校や教会で出会った子供たちの数年後の未来に影響を考えると自分のなかですごく納得ができたというか、フィリピンで活動している意味を感じることができました。



この活動は9日間で終わってしまったけれど、これからの人生を社会人としてどうやって歩むのか、この活動がヒントを与えてくれると思います。自分にできることは何か考え続けるボランティアの精神を学ぶことができて本当に参加してよかったです。

★活動中のこぼれ話

活動のなかで一番感動したのは、フィリピンの教会の日曜礼拝に参加し、バンドの生演奏と一緒に聖歌を歌ったことです。現地の方が歌詞をモニターに表示してくださっていたこともあって、初めて聞く曲ばかりなのに、みんなで歌い、教会全体の一体感を感じることができました。厳かな教会のイメージを覆すほど明るくて壮大で、体を揺らしながらみんなで歌った時間は忘れられない思い出です。

★これまでの私／これからの私

私は知らない文化と関わるのが好きで、この活動に参加しました。普段は本大学の国際寮でRAという運営スタッフとして生活しています。寮生の半数が留学生であり日本にいたがたくさんの海外の友達を作ることができるので、国際交流に関心のある人にとってもおすすめしたいです。今後経験したいことは、夏から行く予定の留学で色々な国を旅することです。

フィリピンの人々がくれた経験

外国語学部 外国語学科 1年 松本 凌弥

★印象に残ったエピソードと感想

フィリピンの街並みを見ていく中で、大きな格差社会を目の当たりにしました。数多の高いビルが立ち並んでいる都市部とは対照的に、道路の整備がされておらず、道端で寝ている人や物乞いをしている子供などがみられた地域もあり、日本の暮らしとかけ離れたそんな様子を見て、気の毒に感じていた自分がいました。しかし厳しい暮らしの中でも、彼らはとても幸せそうで、いつも笑顔で、楽しそうでした。時代が進む中で簡略化される物が増え、便利な世の中になった分、人と交流する時間の大切さが薄れてきているように感じています。一方でフィリピンの方たちは日々、人とコミュニケーションをとる時間が多く、それが生活に大きな幸福感を生んでいることを身に染みて感じました。現地の小学校に行った時は、子供たちは皆嬉しそうにはしゃいでいて、遊んでいて、ずっと笑顔で、一緒にいた時間はとても楽しかったです。しかし正直、活動する中でこれはちゃんと支援できているのか、もっと出来ることがあるのではないかと思います。それまでは支援のために物資やお金などの「物を与える」ことが助けになると思っていましたが、そうではなく、将来につながるための「きっかけ」を与えたり、環境によってある人の活躍の機会が失われていることに対し、潜在的な可能性を引き出すための場を設けたりすることが大切だと学びました。格差社会の現状に心痛む人も多いと思いますが、その痛みを持ちながら生きること、ただ現状を知っていることだけでも意味があります。小さなことでも大きなインパクトにつながることをこの目で見た私は、この経験を糧に国際的な社会問題の解決に少しでも尽力していこうと思っています。



★活動中のこぼれ話

フィリピンに行く前にタガログ語を勉強していて、実際に現地の人にそれが通じたときはとても感動しました。知っている言葉が多いとその分皆の手助けができたり、コミュニケーションの幅も広がるため、事前に勉強しておくことはお勧めです。また、タガログ語だけでなく英語もある程度できるようにしておくことで、現地の人達からの様々な深い内容の話が理解できるためとても勉強になります。

★これまでの私／これからの私

私は将来したいことが明確にはまだ決まっておらず、今のうちに出来る様々なことに目を向けて日々過ごしています。外国語に触れることが好きなので、留学生と関わる機会を積極的に作るようにしています。このボランティアワークキャンプもそうですが、自分の成長に繋がるなど思ったことは、多少きついことでも積極的に飛び込んでみる方が絶対いい経験になると思います。



瞬間の出会いに感謝し今を生きる

人間科学部 社会福祉学科 1年 朴 好苑

★印象に残ったエピソードと感想

クラクションの音が飛び交い、譲る様子を覗くことの出来ないバイクの走行量。そんな道路の中心に立ち物品販売をする人。鉄パイプを持ち遊ぶ小学生くらいの子どもたち。現地での活動の中で一番最初に感じたのは、様々な人の生活音や匂い。同時に光と影の存在、つまり格差の違いだった。私たちが宿泊したホテル周辺は約 45 階相当のビルが建ち並ぶ市街地でありとても華やかな印象であったが、1本道を出ると見えてくるのはおびただしい数の家。川沿いに進むとスラム



街のように決して安全とは言い難い家々が建ち並び、一家に3、4名分とは思えない程の洗濯物が干されていた。様々な疑問や考えが頭をよぎり、表面上で見えるフィリピンの華やかさとは掛け離れた大きな落とし穴を見つけた気がした。しかし、街で度々目にしたイエス・キリスト像や教会。そこで暮らしの拠り所を目にし、忙しい毎日を送る人々の静けさを取り戻す瞬間に出逢った。そんな、異国の地で初となる礼拝は驚きの連続だった。日本や韓国の厳かな礼拝とは異なり、ポップで明るい讃美歌に身を任せハンドクラップをする姿は、クリスチャンである私にとってキリスト教に対する価値観が大きく変わる機会となった。礼拝後は子ども達の眩しい笑顔からエネルギーチャージをし、ダンスや劇、手洗い・歯磨きダンスを披露し素晴らしい時を過ごすことが出来た。何よりフルートで「アメイジング・グレイス」を演奏したのち、素晴らしい心が安らいだ、という声を頂いた時は目に涙が浮かんだ。そして何故か、この教会で出会った子ども達、またその親御さん、FH(現地支援団体)スタッフの笑顔をおぼろげに覚えてはならないと感じた。

FH の活動説明や食を共にする前、お祈りを通してすべての始まりに感謝しその時を楽しむ心の在り方。この活動を通して今を忙しく生き、立ち止まろうとしない私に今この瞬間を大事にすること、そしてその瞬間の出会いに感謝することを認識させられる機会となった。

★活動中のこぼれ話

貧困、豊かさ、社会全体の幸せとは何か、その実現のためにはどんな仕組みが必要か。普段座学で得る社会問題はどこか他人事のように感じており、問題提起はされているのにも関わらず何故未だに解決に進んでいないのか。という疑問を社会福祉を学ぶ中で強く抱いていた。「幸せの形は人それぞれ」このような言葉があるように確かに幸せの形は人それぞれあるものの、貧困地域で生きる人はどのように考えているのだろうか。一定水準の経済力を持つ私たちだからこそその考え方ではないのだろうか。という様々な疑問を抱いていたが、日帰りホームステイ先で自身が固定概念、先入観に捕らわれていることに気づかされた。「幸せと経済的理由の貧困は比例するものではない。」決して広いとは言い難い家に大家族で暮らす彼らにとって家族がどれほど大切でかけがえのない存在なのかをこの言葉から考えさせられた。

★これまでの私／これからの私

韓国生まれ、日本育ちという自身のアイデンティティーについて考える機会が多かった私が活動を通して固定概念や先入観の在り方について考え、仲間と共有する事はとても貴重な時間となった。これからの大学生活において、留学やボランティア活動、所属している西南学院大学管弦サークル活動で沢山のことを吸収し、考える時を自分自身で創り出して行きたい。

貴重な9日間の経験

人間科学部 社会福祉学科 1年 末次 くるみ

★印象に残ったエピソードと感想

私がこのボランティアに参加したのは、実際に言語が通じなくても分かり合えるのか、そして当たり前ではない生活を実際に体験してみたいと思ったからである。実際に行ってみて感情や表情などは通じ合える部分が多くて、笑顔で接することでその時間を現地のいろんな人と共有できたことが良かった。最も印象に残ったことは、小学校に行くと子どもたちが「わー!」と喜んでくれて、まるで芸能人になったみたいにいる子どもたちや先生が私たちを温かく迎え入れてくれたことだ。フィリピンの現地の人達はとても冗談が好きで、話しているときも本当に冗談が見抜くことが難しかった。それぐらい親しみやすく、温かい人が多くて、笑顔で私たちと接してくれた。現地でのいろんな人との交流がとても楽しく、特に小学校のお母さんたちと折り紙で交流し、日本の折り紙を教えるだけでなく、フィリピンの折り紙やタガログ語も教えてもらい、異文化交流をすることができた。交流をする中で、初対面でも広い心、キリスト教での「隣人愛」の心を持って接することで、この「今」という時間を大切にしていると気づいた。小学校でダンスのパフォーマンスを披露したあと、子どもたちが日本語で「ありがとう」と言ってくれて、その後、私たちがタガログ語で「salamat」と返した。このとき、現地の人と気持ちを通じ合えたと感じた。この9日間の貴重な経験をさせてもらったことに本当に感謝し、ここで感じた今一瞬を無駄にせず、強くたくましく生きる力を忘れずにいろんなことに挑戦し続けたい。



★活動中のこぼれ話

ホームステイのときに FH(現地支援団体)のスタッフとある一人の子どもが踊っていて、そこで私も「踊ってみて」と言われたので踊ってみたらとても盛り上がって楽しかった。また、フィリピンではキリスト教を深く信仰しており、初めて、教会の雰囲気味わえたことが印象的だ。私たちが行った教会は非常に明るくてみんなでいろんな曲を歌い、楽しくお祈りを捧げた。

★これまでの私／これからの私

私は、貧困とは、十分な教育が受けられなかったり、住む家がなかったり、経済的に不安定で食事も十分に取れない人などだと考えていた。しかし、今回のボランティアで実際に学校や教会に行っている人々と触れ合う中で、貧困=不幸ではなく、私たちが勝手にこういう人たちは不幸だと決めつけているだけなのかも知れないと考えた。小学校や教会で出会った子どもたちが本当に貧困なのかという分からない。しかし、その人にとって家族や周りの地域の人達と今の一瞬を大切に一生懸命に生きていくことが大事と気づいた。では、なぜ今回このボランティア活動をしたのかと考えたとき、パフォーマンスや衛生教育、折り紙などを通し、私たちが披露し、伝えることでそのとき一瞬かもしれないが、少しでもまた、頑張ろうなど生きる希望を持ち、自分の将来のプラスのなってほしいからだと思った。実際に私たちもたくさんの愛をもらった。この愛を忘れずにこれからもいろんなことに挑戦し続けたい。



すごいことができなくても

人間科学部 心理学科 1年 栗本 美優

★印象に残ったエピソードと感想

「It is not how much we do, but how much love we put in the doing. (大切なのはどれだけ多くのことを施したのかではなく、それをするのにどれだけ多くの愛を込めたか。)」これは、私が9日間の活動中で常に意識していたマザーテレサの言葉である。海外ボランティア初日、FH(現地支援団体)本部で活動内容の確認などを行っているとき、私自身初海外でボランティア経験も十分ではない状態だったため、貧困で苦しむ人をどう助けようか、たった9日間で誰かの役に立てるだろうかと不安でいっぱいだった。活動が楽しみでありながら憂鬱だった私の助けになったのがその言葉だった。ものすごく立派なことができなくても笑顔で接するだけで、小さな行いの積み重ねをするだけで、自分にとっては何でもないことが相手にとっては心の支えになることが分かり、海外ボランティアに対する考え方が変わった。マラボン小学校やナボタス小学校を訪問した時、小さな愛の積み重ねを意識した。折り紙やダンスなどの出し物をするとき常に笑顔で接した。自分の英語が思うように通じなくても一人一人に笑顔で話しかけることで、完成した時に子供たちが、楽しかった、もっと作りたい、一緒に写真を撮りたいなどその一瞬一瞬の出来事を心の底から楽しんでくれた。制服を買い替えるお金がなく学校をやめなければならない子供や複雑な家庭の事情により心に負担がある子供など様々な形の貧困を目の当たりにする中、楽しい時間を過ごせたことを言葉にして伝えてくれたことが嬉しかった。ステージでダンス Ola!!を披露する私たちを見て全力で楽しんだことや、一緒に写真を撮ったりたくさんハグをしたこと。これらの交流が子供たちやその保護者の心の支えとして少しでも役に立てたらと思った。



★活動中のこぼれ話

私は車での移動中はフィリピンの町を観察しながら過ごしていた。道路と道路を仕切る形で花壇があるのだが、大体は大量のごみが捨てられていたり、住む場所のない人々が荷物を広げ横になっている光景ばかりだった。しかしある一角だけは違った。赤やピンクの花が咲き誇り緑が生き生きとしている。決してきれいとは言えない身なりの男性2人が、その花たちに一生懸命水を与えていた。その美しい光景を私は車で走り去るほんの数秒の間に目に焼き付けた。花壇の花を見てひととき美しく思い感動したのは、咲き誇った花が、貧困地域に追いやられ生活が苦しいものになっても自分たちの芯や個性を大切に生きていこうとするフィリピンの人々の姿と重なったからだと感じた。小さな行いにも愛を持ち、今この瞬間をたくましく生きろということを教えてもらった気がした。マラボン小学校では仲良くなった子供たちから花とブレスレット、PTAの方からは全員お揃いのブレスレットをもらった。活動中も帰国した今も大切に身につけている。

★これまでの私／これからの私

私には他者より卓越したものや強みと呼べるものがなかった。何かのきっかけになればと思い今回の活動に参加し、濃い9日間で最高の仲間と過ごしたことで少し自分に自信を持つことができた。周りの仲間は活動経験が豊富で私は焦りを感じていたが、私には笑顔で接する力と人のいいところを見つけ伸ばす力がある。これは一緒に活動した仲間たちが気づかせてくれた。将来のことははっきりと決まっておらず不安でいっぱいだが、今回の活動で出会ったすべての人に感謝して、これからの人生、小さな愛の積み重ねを意識してたくましく生きていこう。

マングローブの木の如く

(引率) 宗教主事 劉 雯竹

◆活動を終えて

6年前初めてワークキャンプに参加した際に訪れたマラボン小学校に、今年は再び足を運ぶことになりました。学生たちが当時、子どもたちの校舎の裏側にマングローブの苗を植えたのを覚えています。その辺りには小さな川があったものの、ゴミが散乱し、水が汚れていて、動物の死骸もあったと当時の引率者の一人は振り返ります。

今回、再び訪れた時に、マングローブの背丈が伸び、その周りに緑が増えたことに感激しました。マングローブの木を植えた理由として、大気中の二酸化炭素を減らし、地球温暖化の進行を食い止めることや、周辺地域の生態系に深く関わり、様々な生き物たちの命を育む役割が挙げられます。

マングローブの背丈が伸びたように、今回の活動に参加された学生たちの成長を身近で感じることができました。「百聞は一見に如かず」という諺があります。体験しなければ見えない世界と他者と深く出会い、体験した人にしか語れないことを、生き生きと語る時の学生たちの姿に希望を感じました。

若者たちを待ち受ける未来がどのようなものであるかは知り得ませんが、時代や環境がどんなに変化しようとも、参加者の皆さん一人一人が、今後マングローブの木のように成長し、平和を作り出す者になる、と私は確信しています。



喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい

(引率) ボランティアセンター職員 塚田 恵美子

◆活動を終えて

今回のプログラムでは、ワークキャンプの事前事後合わせて6回の研修を行いました。

事前研修では、フィリピンの歴史・文化、トレンド、貧困についてグループ学習を行い全員で共有したり、日本国際飢餓対策機構職員による講義を受けました。また、現地での衛生教育活動のための寸劇や手洗いダンス・歯磨きダンス、交流活動のための折り紙や出し物の企画から練習まで、研修時間以外にも様々な準備を行いました。現地では、毎日活動後に「西南タイム」で様々な思いを共有し、宗教主事の選ぶ聖句を心に留めつつ一日を振り返りました。学生たちは、日々、翌日の活動の対象者や会場に合わせて、タガログ語での自己紹介を考えたり、出し物を改良するなどしていました。

フィリピンでの9日間には、タイトルの聖句「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい。(新約聖書ローマの信徒への手紙12章15節)」を感じる場面が数多くありました。共に喜び、共に泣く心は、現地の方々や、学生同士、私たちスタッフにも向けられていました。帰国後研修の最後の西南タイムで気持ちを分かち合い、報告書作成や報告会準備に勤しむ姿やチームワークに触れ、改めてそう感じています。



様々な経験をして成長した15人が、キャンパスの内外や職場など、この春からの新生活の場に新しい風を吹き込んでくれる、そんな予感がしています。